＜論　　文＞

イギリスにおけるユグノーの経済活動

金　　哲　　雄

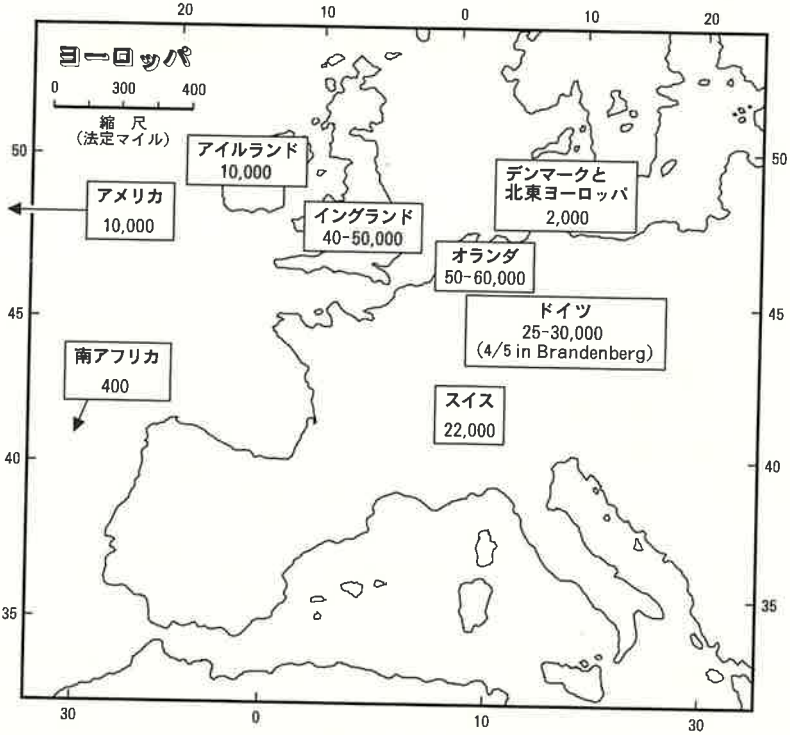
目　次

はじめに
一　工業
　1　繊維工業
　2　その他の工業
二　商業・金融業
むすび

はじめに

ルイ14世治世下においてフランスを後にしたユグノーのうち，４～５万人がイギリスへ移住した。彼らの移住の時期は，フランスの諸条件を反映している。1660年代から1670年代までの間では，その移住の流れは小流であった。1679年からユグノーに対する圧制的勅令が増加するにつれて，その流れは小川となり，1681年の竜騎兵（dragonnades）の襲撃とともに川となった。ナント勅令廃止（1685年）以降にはその流れは奔流に転化し，その後移住数は，18世紀に入って迫害が強くなった際に時折，増加したものの，減少していった。この新たな来住者は，ロンドン，カンタベリーの二大センターに自然に引き寄せられる傾向にあった。フランスからの移住者は，ロンドンの人口の約５％を構成していた（図１，２，３参照)。概してユグノー定住地域は，イングランドの南東部，それよりは少ないが，南西部に分布していた。すべてのユグノーのコミュニティは，エディンバラ，チェスターを除いては，セヴァーン川からウォッシュ湾に引かれたラインの南に位置していた。そして，エディンバラ，チェスターは，

図１　ルイ14世治世下におけるユグノーの移住先と移住数



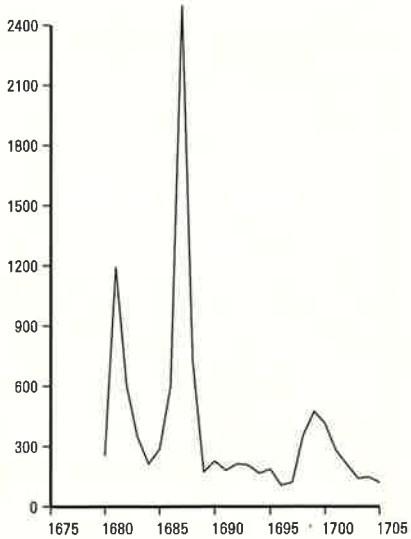
（出所）Robin D. Gwymn, *Huguenot Heritage. The history and contribution of Huguenots in Britain*, (London, 1985), p.24.

アイルランドへの行き来の通過点になっていたように思われる[1]（図４参照）。

1）Robin D. Gwynn, *Huguenot Heritage. The history and contributoin of the Huguenots in Britain*, (London,1985), pp.35-39.　図１は，サミュエル・ムール（Samuel Mours, *Les Eglises Réformées en France: tableaux et cartes* (Paris,1958), pp.176-178）の示唆に基づいて示された控えめな数字である。ドイツ，オランダ，アメリカへの移住数は低く見積もられる傾向がある。フランスを後にしようとして妨害された移住者の数が考慮されていないからである。この点からして，移住総数は20～25万人が合理的だあろうとされている（Gwynn, op.cit.,↗

このユグノーの移住は，経済史家リプソン（E. Lipson）言明したように「イギリスの産業史上，第３番目の大きな画期的な出来事」[2] であった。ユグノーは，すでに確立していた産業部門を改良するとともに新たな分野を移植することにより，イギリス産業に大きな影響を及ぼした。当時のイギリスは，フランスやオランダを相手とする重商主義競争を闘い抜こうとしながら，単に毛織物工業のみならず他の産業部門をも含んだ均整のとれた資本主義的工業生産の

図２　ロンドンにおけるフランス教会数
（1680～1705年）

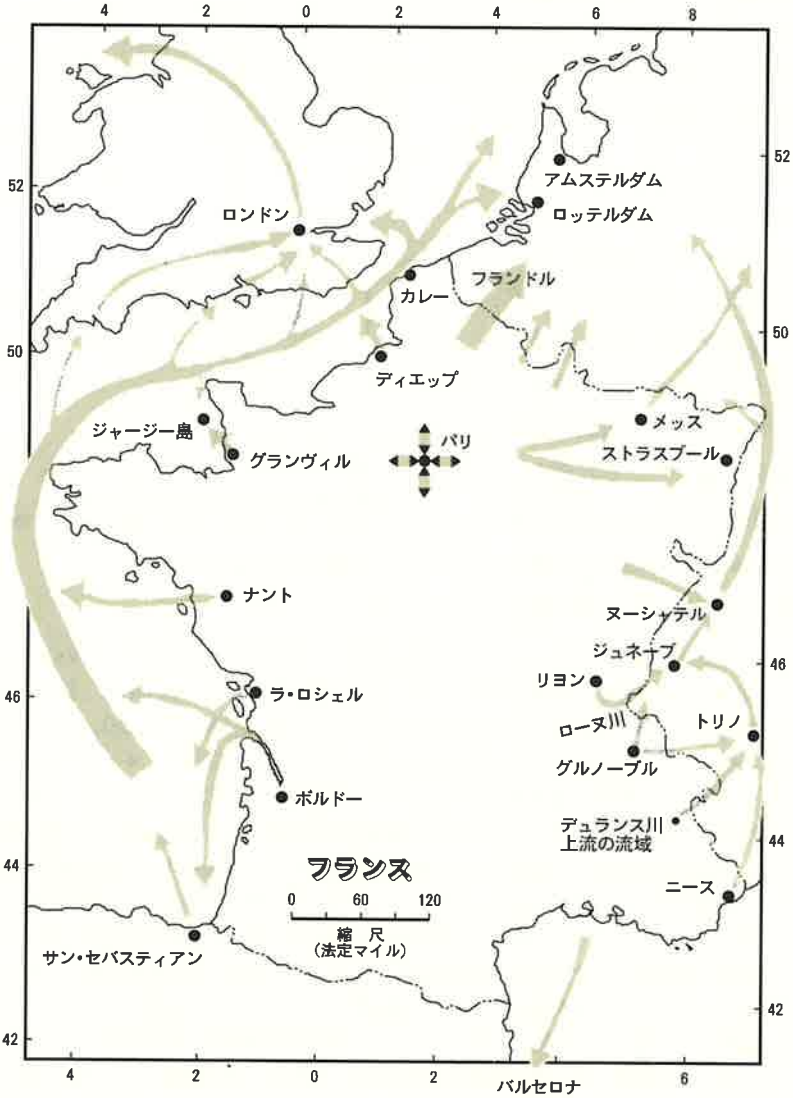


（出所）Gwynn, op.cit., p.36.

↘ p.23)。17世紀末には，ロンドン一帯に30のユグノー教会があった（Warren C. Scoville, *The Persecution of Huguenots and French Economic Development, 1680-1720* (Berkeley et Los Angeles,1960), p.123)。ヴァイスによれば，その移住数は約７万人と推定され，彼らのほとんどはノルマンディー，ピカルディー，西部の海岸地域，トゥレーヌからの移住者であった（Charles Weiss, *Histoire des réfugiés protestants de France depuis la révocation de l'Edit de Nantes jusqu'à nos jours* (Paris,1853), Ⅰ, pp.321-322)。スマイルズは，その数を約10万人とした（Samuel Smiles, *The Huguenots, Their Settlements, Churches, and Industries in England and Ireland* (London, 1867), p.313)。1687年12月の「フランス人救済委員会」（French Relief Committee）の最初の報告によれば，１万5500人の移住者が救済され，そのうち１万3500人がロンドンに定住した（Ibid.,p.316)。なお，ユグノーの初期移住者は，16世紀後半にフランスにおいて最高潮に達した宗教的迫害をのがれてイギリスに庇護をもとめていた。

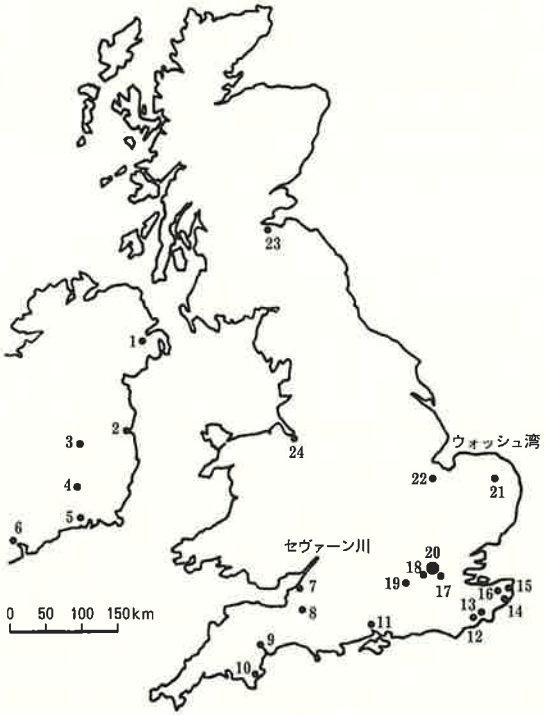
2）E.Lipson, *The Economic History of England* (12th ed; London: A. and C. Black, 1959), Ⅲ, 60.　最初のものは14世紀におけるフランダース人の到来であり，第２番目のものは16世紀におけるオランダ人とワロン人の到来である（Ibid)。

図３　ユグノーの主要な移住経路



（出所）Gwynn, op.cit., p.37.

図4　イギリスにおけるユグノーの主要な移住都市



1. リスバーン　2. ダブリン　3. ポートアーリント
4. キルケニー　5. ウォーターフォード　6. コーク
7. ソーンベリー　8. グラストンベリー　9. エクセター
10. ダートマス　11. サウサンプトン　12. ウィンチェルシー
13. ライ　14. ドーヴァー　15. サンドウィッチ
16. カンタベリー　17. グリニッジ　18. ハマースミス
19. ソープ　20. ロンドン　21. ノリッジ　22. ウィトルシー
23. エディンバラ　24. チェスター

（出所）Janine Garrisson, *L'Edit de Nantes et sa révocation, histoire d'une intolerance*, (Editions du Seuil, 1985), p.284 に基づき作成。

機構をつくり上げようとしていた。この資本主義的発展に，ユグノーは促進的な役割を果たすことになるのである。事実，織物工業などの諸工業並びに商業，金融業は，ユグノーの来住によって大いに発展した。

本稿では，産業革命前夜のイギリスにおけるユグノーの経済的役割を明らかにするとともに，あわせてフランスの工業化と比較してイギリスの工業化におけるユグノーの役割の意義についても考えてみたい。

一　工業

1　繊維工業

フランスは長い間，上質の絹織物，とくに贅沢な絹織物の生産において他のどの北ヨーロッパ諸国よりも有利な立場を保持してきた。イギリスは，トゥール，リヨン，ニームの絹織物製造業者への依存から解放を望んでいた。イギリスでは17世紀以来，絹織物が製造され，1661年には絹の撚糸工のギルドにおいて4万人以上のメンバーがいたが[3]，しかし，多くの贅沢なタフタや他の上質な絹織物をフランスから輸入していた。例えば，イギリスは1686－88年において年平均，ラストリンとアラモード21万2500ポンド，他の絹織物50万ポンドをフランスから購入していた[4]。それゆえ，ユグノーの熟練絹織物業者のすべては，カンタベリーのブラックフライアーズ，ロンドンのスピタルフィールズへ移住した際には，熱烈な歓迎を受けたのであった[5]。

3）Scoville,op.cit.,p.324.

4）Adam Anderson, *An Historical and Chronological Deduction of the Origin of Commerce, from the Earliest Accounts etc.* (London,1801), Ⅱ, p.571. そのフランスからの輸入額は，絹織物以外にリンネル70万ポンド，紙5万ポンドを含め，計146万2,500ポンドであった（Ibid)。

5）Scoville, op.cit.,p.324.　カンタベリーの中心地にある礼拝堂には，フランス移住者の愛に満ちた結社の記念がいまだに保持されている。それは柱幹に刻まれたフランス語の励ましの銘文である。川岸の町には，フランス人の職工の家が今でも建っている（Henri Hauser, La naissance du protestantisme, 1962, p.79.↗

フランスからの移住者が深く関与した「王立ラストリン会社」(Royal lustring company) は，1692年に特許状が与えられた[6]。この会社では，ロンドンで670台，イプスウィッチで98台，計768台の織機が使用されていた[7]。ユグノーは，その会社の設立メンバーとして加わり，熟練労働と経営の多くの部門を担当していた。「王立ラストリン会社」は，英仏植民地戦争 (1689～97年)，ウィリアム王からの毎年の助成金，タフタに対する約53%の輸入関税，すべての輸入を禁止する1697年の条令などの要因も伴って，1720年の「南海泡沫」事件で倒産するまで繁栄したのであった。もちろん，「王立ラストリン会社」がイギリスにおける唯一の絹織物工場ではなかった。事実，ユグノーを含んだ38人の絹物商人や絹織物製造業者たちは，1693年頃にこの会社と競合していた。彼らは，リヨンにいるフランス人と共謀してフランスの絹をイギリスに密輸入しようとしたのであった[8]。

17世紀末にロンドンで製造された錦織の絹織物は，例外なく3人のユグノー移住者ローソン (Lauson)，マリスコ (Mariscot)，モンソー (Monceaux) によってもたらされたものであった。そのデザインを与えた職工もまたボードワン (Beaudoin) という名の移住者であった。モンジョルジュ (Mongeorge) という名の労働者は，タフタに光沢を与えるリヨンの秘密技術をもってイギリスに移住してきた[9]。他の移住者たちも絹を撚る新たな方法，ダマスコ織の新たなデザイン，服を染色して仕上げる特殊技術，リボン織布や絹靴下の編み物における改善，織機の使用技術，経営管理方法などを普及させた。これらすべては，フランスの製造業者たちが固守してきたものであった。このようなユグノー熟練織工の移住がなかったならば，イギリスはこれらの技術を修得するに

↘ 倉塚平訳『プロテスタンティズムの生誕』未来社，1966年，97ページ)。

6) David MacPherson, *Annals of Commerce, Manufactures, Fisheries, and Navigation etc.* (London, 1805), II, p.651.

7) W.H.Manchée, "Some Huguenot Smugglers. The Impeachment of London Silk Merchants, 1698," *Proceeding of the Huguenot Society of London*, XV (1934-1937), pp.422-423.

8) Scoville, op.cit., pp.324-325.

9) Weiss, op.cit., I, pp.323-324.

あって，かなりの困難と多くの時間を要したにちがいないのである[10]。

ノーリッジでもまた，ユグノー移住者の役割は大きかった。彼らはラストリン，錦，ホードソア，タビネット，ベルベットなどの製造に大きな成功を収めた。ノーリッチでユグノーが定住してからの50年間は，その都市史上最も繁栄していた時期として知られている[11]。

ユグノーがイギリスの工業に及ぼした影響のうち，絹織物工業における影響ほど大きいものはなかった。イギリスの絹織物工業は，1680年以前の約20年間，絶えず衰退し続けてきた。しかし，ユグノーの到来とともに，まずブラックフライアーズにおける絹織物工業が急速に発展した。この地域では，1000台の織機が使用され，2700人の労働者が雇用されていた。しかし，大多数のユグノーは，最終的にはロンドンのスピタルフィールズに定住するようになった[12]。ロンドンの絹織布工会社の1713年報告によると，絹織物の生産量は1664年の20倍以上になり，イギリスで製造された絹，錦，リボンはフランスと同質のものになっていた。25年以上前にはイギリスで製造されていなかった，ずきん用などの黒い絹の生産量は，毎年30万ポンド以上に達した。これらは，以前にはフランスから輸入されていたものであった。このように絹織物の生産が増加することにより，トルコ，イタリアなどへの絹織物の輸出が増加するようになった[13]。

以上のようにユグノーの来住の結果，イギリスは，ラストリンなどのすべての絹織物を国内消費のために供給するだけではなく他国にさえ輸出するようになった。18－19世紀中葉のイギリスは，絹織物工業から大きな利益を得ていた。その輸出額は，1820年には37万1000ポンド，1847年には97万8000万ポンドであった。1849年には，フランスへの輸出額だけでも400万フランに達していた。一方，フランスのリヨン，トウールなどの絹織物工業は，損失をこうむったのであった[14]。

---

10) Scoville, op.cit., p.325.

11) Smiles, op.cit., pp.336-337.

12) Weiss, op.cit., Ⅰ, p.323.

13) MacPherson, op.cit., Ⅲ, p.34.

14) Weiss, op.cit.,I,pp.325-328.　1698年には，リヨンでは織機数が1万3000台↗

ナント勅令廃止以前イギリスは，ノルマンディー，ブルターニュから多量の帆布を購入していた。その額は，1669年だけでも17万1000ポンドに達していた。モルレ（Morlaix）からも，毎年450万リーヴルを購入していた。フランス教会の長老や執事は，イプスウィッチにおいてリンネル工場設立のために資金を提供した。フランスの最も優秀なリンネル製造業者ボノム（Bonhomme）は，イギリスにおいてリンネル工業を普及させ，帆布製造を教えた。1685年には，新たな移住者たちが，4年前に設立された未染のリンネル工場に，ある帆布工場を付け加えた。他のリンネル工場も，イギリスの諸都市で設立するのに成功した。その結果，ノルマンディーやブルターニュの生産物に対する需要が著しく減少するようになった[15]。

ルイ14世は，フランスが以前リンネルを供給していたので，イギリスでの新たな工場がフランスのイギリスにおける市場の多くを吸収しないかどうかについて非常に不安であった。彼は，大使に移住織工を説得してノルマンディーやブルターニュに戻すように命じた。1686年と1687年の大使の報告によると，移住者のほとんどは帰国し，彼らの工場を破滅したといわれていた。にもかかわらず，帆布工場や未染のリンネル工場は，その後イプウィッチや他の諸都市に出現し，フランスからの輸入量も1680年以前より減少していた[16]。

ユグノー移住者たちは，カンブレ・バチスト（batistes de Cambrais）として知られた上質のリンネル（白麻布）の製造業を最初に移植した。ナント勅令廃止以前イギリスは，毎年約20万ポンドのバチストを購入していた。イギリスは，カンブレやトゥルネ（Tournai）の労働者を喜んで歓迎した。彼らの多く

↘ から400台に，トゥールでは織機数が8000台から1200台に，生糸撚糸場が700から70に，労働者数が4万人から4000人に，リボン用織機数が3000台から60台以下に減少した。それにもかかわらず，リヨンとトゥールは，依然としてフランスの絹織物工業において重要な位置を占めていたのである（Ibid., I, p.328)。

15) Ibid., I, pp.328-329. ブルターニュからの輸出額は，1686年に200万リーヴル以上減少したという。その12年後には，リンネル貿易は，モルレ，ブレスト（Brest)，ランデルノー（Landernau）で3分の2程減少してしまった（Ibid., I, p.329)。

16) Scoville, op.cit., pp.326-327.

は，最終的にはスコットランドに定住し，エディンバラで1730年に5エーカの土地をもらってバチストの大工場を設立するようになった。それ以来，ユグノーが居住していたエディンバラの一地区は，「ピカルディー地区」(quartier de Picardie) という名で呼ばれるようになった[17]。

ユグノー移住者たちは，毛織物の製造や染色の新たな方法を普及させることによって，バーンスタプルを毛織物工業の有名な都市にするのに貢献した[18]。イギリスの毛織物工業は，彼らの役割によって著しく発展した。その結果，1703年頃には毛織物の輸出量は，チャールズ2世（1630－85年）の治世下より100万ポンド以上増加していた[19]。

キャリコ捺染業は，リッチモンドで1690年にユグノーによって開始された。さらに重要な第2番目の工場は，エセックスのブロムリー・ホール (Bromley-Hall) で設立され，1768年にランカシャーへ移された。他のキャリコ工場は，18世紀初めにロンドン近郊で設立された。それらは，フランスにとって新たな損失であり，イギリスにとって新たな富の源泉であった[20]事実，キャリコ捺染業は，後期のステュアート朝（1660－1714年）において発展した。その結果，1711年まで約100万ヤードのキャリコが毎年捺染されていた[21]。そして，ユグノーは，後に綿織物工業を急速に発展させる上で重要な役割を果たした[22]。

イギリスにおける最初のつづれ織の工場は，フランスのゴブラン (Gobelins) 織（17世紀後半に，ゴブラン兄弟によって創業された）の技術を受け継いだパリゾー (Parisot) という名のプロテスタント改宗者によって，ロンドンのフラムで設立された。イギリスの貴族が1万ポンドを貸し付けることによってこの企業を援助したが，この試みはうまくは行かなかった。しかし，

17) Weiss, op.cit., I, pp.331-332.
18) Charles E. Lart, "The Huguenot Settlements and Churches in the West of England," *Proceeding of the Huguenot Society of London*, VII, p.290.
19) Weiss, op.cit., I, p.332.
20) Weiss, op.cit., I, p.331.
21) Gwynn, op.cit., p.68.
22) Scoville, op.cit., p.327.

この企業は，パサヴァン（Passvan）という名の移住者によってエクセターに移転し，先行のゴブラン織の労働者の援助も伴って繁栄した[23]。

帽子製造業も，ユグノーによって移植された最も重要な工業の一つである。フランスでは，この工業のほとんどはユグノーの手中にあった。彼らだけが，ノルマンデイーにおけるコードベック（Caudebec）の高価な帽子をイギリスやオランダと取引していた。ナント勅令廃止後，彼らのほとんどが秘密技術をもってロンドンへ移住した[24]。1708年にはイギリスは，ビーバの皮を準備し「とても美しくて軽い」帽子を製造する上で，フランスよりもすでに優位に立っていた。ルーアンやコードベック出身のユグノーは，防水のフェルト帽子を製造するため兎の柔らかい毛とビクーナの毛との混合方法を普及させた。その結果，ウォンズワース（Wandsworth）で設立された帽子工場は繁栄した[25]。一方，フランスは，フェルト帽子の輸出者よりもむしろ輸入者になった。イギリスのフェルト製造会社（Feltmakers' Company）も，コーデバック（Cordeback，フランス風の）と呼ばれたフランスの帽子が一般に使用されていることに不満をもらしたのであった[26]。歴史の皮肉であるが，その後ローマのカトリック枢機卿は，ユグノー移住者によってウォンズワースで製造された緋の帽子を購入せざるを得なかった[27]。

2　その他の工業

アングレームやオーヴェニュのフランス人は長い間，書き物用や印刷用の良

23）Weiss, op.cit., I, p.333.

24）Ibid.　遅くとも1543年には，フランドルやフランスからのプロテスタント移住者がフェルト帽子製造の技術をイギリスに移植していた（Lipson, op.cit., I, p. 492）。

25）Scoville, op.cit., p.329.

26）Gwynn, op.cit., p.68.

27）Weiss, op.cit., I, p.334.　この帽子製造の技術は，フランスでは40年以上も失われたままであった。しかし，18世紀中葉になって始めて，マチユ（Mthieu）という名のフランスの帽子製造業者が，ロンドンで長い間働いて得た技術をフランスに持ち帰り，サン・アントワーヌ（Sain-Antoine）郊外で大きな工場を設立したのであった（Ibid, pp.333-334）。

質の白い紙を製造する技術に優れていた。イギリスは，粗野な紙については国内市場に対して十分に供給していたが，オランダやこれらのフランスの製造業者から白い紙のほとんどを購入していた。ナント勅令廃止前後に，多くのユグノーの熟練製紙業者がイギリスに移住した。この移住についても，イギリス政府は大いに喜び，フランス政府は深く悲しんだのであった[28]。

確かに，ユグノー移住者が，良質の白い紙をイギリスへはじめて移植したのではなかった。エリザベス治世下やと1685年以前には，その発明に対する特許状が与えられて工場が操業し始めていた。しかしながら，ユグノーは，弱体化した製紙業を強化したのであった。彼らは，製造や漂白に関する最も重要な秘密方法をもたらし，彼らの資本，経営能力，熟練の人力によって新たな工場の設立に貢献した。そして，製紙業にきわめて密接に係わったユグノーの定住地域が，サウサンプトンであった[29]。フランス大使バリヨン（Barrillon）は，「白紙製造会社」（White Papermaker's Company，1686年に特許状が与えられている）を破壊するのにある程度成功した[30]。彼は，一つの工場の労働者に対して，彼らがフランスに戻るのを決心させるために2300リーヴルまで分配したのであった。しかし，ウィルアム3世（1650－1702年）の治世下では，工場は再開され，製紙業は発展していったのである[31]。

18世紀初期の製紙業におけるユグノーの役割について，アンダーソンは次の

28）Scoville, op.cit., pp.327-328.　1714年までに，約200の製紙工場が存在し，イギリス国内の約3分の2の需要を満していた（Gwynn, op.cit., p.76)。

29）George H. Overend, "Notes upon the Earlier History of the Manufacture of Paper in England," *Proceeding of the Huguenot Society of London*, XⅢ (1905-1908), pp.177-198; Gwynn, op.cit., pp.76-77.　ナント勅令廃止以前にイギリスでの紙は，ケントの工場，とくにダートフォード（Dartford）の大工場において製造されていた。それは褐色で，きわめて粗野なものであった（Weiss, op.cit., Ⅰ, p.334)。

30）Scoville, op.cit., p.330.「白紙製造会社」は，ジョン・ブリスコ（John Briscoe）が1685年の初めに白紙製造に対する特許を得ていたことと，他の人々が新たな製紙工場の設立を請願していたことの二つの利害が重なって，設立された株式会社であった（Gwynn, op.cit., p.77)。

31）Weiss, op.cit., Ⅰ, p.335.

ように言及している。1690年頃までイギリスでは，褐色の粗野な紙以外はほとんど製造されていなかった。しかし，フランスとの戦争による外国の紙に対する高関税も伴って，イギリスに定住したフランス・プロテスタントと，ごくわずかなイギリスの製紙業者は，書き物用と印刷用の白い紙を製造し始めた。それらの紙は次第に美しさと質の良さを兼ね備えるようになったので，1801－05年にはイギリスは，ジェノヴァとオランダの紙を少しだけ輸入さえすれば事足りるようになったのであると[32]。

ロンドンのガラス製造は，1567年にあるヴェニスの人によって開始された。しかし，その確立は，ユグノー移住者に負っている。ガラス製造の際に使用されている技術用語のほとんどは，フランス語から由来している。すなわち，「溶解」(fondre→found)，「るつぼの位置」(siège→siege)，「炉の角」(coin, cheminée→kinney)，「製造期間」(journée→journey)，「(ガラス板を移動させるための) フォーク」(fourchette→foushart)，「(ガラスの球を転がすための) 平板」(marbre→marmre)，「(溶かし直し用の) ガラスくず」(coulé→cullet) などである[33]。

イギリスに来住した最初のユグノーのガラス製造業者は，ロンドンのストランドにおけるサヴォイ・ハウス (Savoy House) で操業を開始した。しかし，彼らは後に，燃料の便宜上，サリー・サセックスを包含するウィールド地方などへ移動して，ガラス製造業を発展させた。パリのガラス製造業者は，鏡用の大きな板ガラスを製造する技術をもっていることで，とくに有名であった。ナント勅令廃止直後，これらの多くの熟練労働者が移住地をイギリスに求めた。ガラス製造業の一分野は，アブラアム・トヴナール (Abraham Thevenart) によって確立され，大いに成功を収めた。他の高級鉛ガラス工場も設立され，ここでもユグノーは大きな役割を果たした。その結果，イギリスは，多くの様々

32) Anderson, op.cit., II, ,p.594. しかしながら，並の紙に関しては，17世紀末頃にフランスの完全さに達しなかったものの，かなり改良されていた。しかし，18世紀中葉でもフランスの書き物用の紙は，イギリスのものよりもなお幾分か優れていたのであった (Scoville, op.cit., p.329)。

33) Smiles, op.cit., pp.330-331.

なガラス製品を国内市場に供給するのみならず，オランダや他のヨーロッパ諸国に輸出するようになったのである[34]。

フランスは17世紀においてさえ，レース，手袋，嗜好ボタン，金・銀糸の細ひも，つづれ織，貴金属装身具類のような高級な贅沢品で名声を博していた。これらすべての手工業において，ユグノーは，デザインや技術上の方法を普及させるのに貢献した[35]。

ナント勅令廃止直前から1710年までの「金細工会社」（Goldsmiths' Company）の記録によれば，少なくともユグノーのうちには，ロンドンでは120人の金細工人の親方，職人，徒弟，26人の銀細工人，宝石細工人，ダイアモンド磨き工，そして14人の時計製造人，他のイギリスの諸都市では7人の金細工人がいた。有名なマンジー（Mangy）家もユグノーで，ナント勅令廃止前にハル（Hull）に定住し始め，ハルでは1人以上，ヨークでは2人が金細工商を営んでいた。アイルランドの記録によれば，ダブリンでは35人の金細工人，2人の宝石細工人，3人の時計製造人，コーク（Cork）では3人の金細工人が働いていた[36]。これらの職業に従事した他のユグノー手工業者は，すでに16世紀にイギリスに移住していたが，1710－80年には，ロンドンにおいてその数は増加し続けたのである[37]。

エヴァンズが「1680－1775年におけるイギリスのいかなる手工業の歴史も，主としてユグノー細工人と関係しているにちがいない。服装品，装飾品においてと同様に，銀細工品においても新たな基準の贅沢品が，宗教上の理由でイギリスに来た敬虔なカルヴィニストによってもたらされたことは，とても喜ばしい歴史の逆説の一つである」[38] と指摘したように，手工業におけるユグノーの役割は，実に注目すべきものであった。彼らは喝采して迎えら，その中には，

34) Ibid., p.331; Gwynn, op.cit., pp.74-75.

35) Scoville, op.cit., p.330.

36) Joan Evans, "Huguenot Goldsmiths in England and Ireland," *Proceeding of the Huguenot Society of London*, XIV (1930-1933), pp.512-513.

37) Scoville, op.cit.,p.330.

38) Evans, op.cit., p.524.

最も優秀な金・銀細工人であるポール・ド・ラムリー（Paul de Lamerie）も含まれていた。彼らの業績は，1751年のラムリーの死後に減少するが，1730年代と40年代にはそのピークに達していたのである[39]。

建築，インテリア装飾，キャビネット製造へのユグノーの貢献はあまり知られていないが，しかし，ユグノーはイギリス人の生活条件を改善するのに大きな役割を果たしていた。その改善は，1660年代にフランスの影響を受けたドイツの手工業者の援助の下で始まったが，ロンドンに多くの工場を設立したユグノーによって強力に促進された。とくに重要な人物として，ジャン・ペルティエ（Jean Pelletier）とダニエル・マロー（Daniel Marot）を挙げることができる。ペルティエは，1690年代に活躍した彫刻者であり，めっき師でもあった。宮廷のキャビネット製造人として彼は，ルイ14世の宮廷を顕著にした，金めっきで装飾した家具を持ち込んだ。しかし，ダニエル・マローの影響は，より強かった。というのも，彼は家具のデザイナーのみならず，庭園師，オランダとイギリス両国における宮廷のアドバイザーであったからである。パリの指導的な建築家でありデザイナーであった，きわめて多才なジャン・マローの息子ダニエル・マローは，1684年にフランスを後にした。彼は，オランダやイギリスにおいて建築とインテリア装飾とを統合しようとした最初の人物であった。マローの様式を解釈し得る多くのユグノー手工業者は，それを大いに普及させたのであった。この分野でユグノーは，ロンドンのユニークな性格を高めることによって，ロンドンが国民生活においてきわめて重要な役割を果たす上で貢献したのであった[40]。

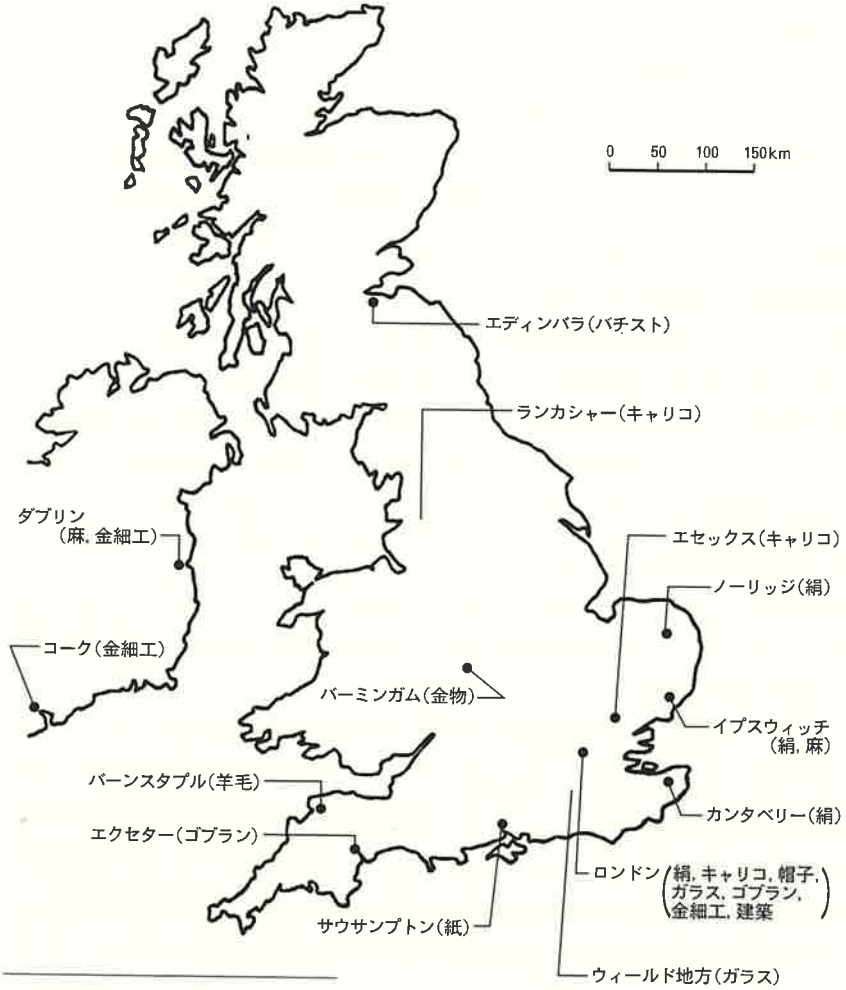
鉱業については，17世紀後半にはじまった後期の移住者よりも，むしろエリザベス期（1558－1603年）にはじまった前期の移住者によって発展した。移住者の貢献は，鉱業自体よりもむしろ，その補助的な技術において顕著であった。これらの発展に伴って，「ミネラル・バッテリー組合」という，新たな形態の事業組織が開拓された。その組合は，鉱業，製造，販売の機能を結び付けた。この点では，後期のユグノー移住者はあまり大きな役割を果たさなかったとさ

39）Gwynn, op.cit., p.73.

40）Ibid., pp.73-74.

れる[41]。しかし，そのユグノーの金属細工人は，イギリスで工場を設立し，針やピン，良質のナイフや鋏，外科用の器具，精巧に細工した錠，鉄製や銅製の家庭製品を製造したのであった[42]（以上の工業部門におけるユグノーの役割については図5参照）。

図5　イギリスにおけるユグノーの主要産業都市，地域



41）Ibid., pp.75-76.

42）Scoville, op.cit., p.330.

二　商業・金融業

イギリスの商業は，イギリスの工業に及ぼしたユグノーの影響によって大きな利益を得た。外国の人々は，進んでイギリスの品物を購入しようとした。それらは，イギリス自身が決して到達できない，フランス特有の良質を備えていたからである。イギリス国内においても，多くのものがフランスの（gallic）名の下でしか売れなかった。とくに17世紀末以降きわめて需要の高かったフランスの織物は，売れ行きを保証するために，ユグノーの製造業者に頼らざるを得なかった。ある移住者は，ロンドン・ホール・ストリート（London-Hall-Street）でフランス製の織物商品などを販売するために，４つの店を開業して巨額な財産を築き上げた。彼の例にならって，他の移住者も，スモック・アリー（Smock-Alley），ビショップスゲイト（Bishopsgate）で成功を収めた。イギリスの商人たちは時折，これらの移住者によってもたらされた損害に憤慨するほどであった[43]。そして，エデインバラ一帯の厳格なスコットランド人は，市民の日常的な衣類のファッションを良質なものに，浅薄な個人的装飾品に変えたとして移住者を非難した[44]。

対フランス貿易におけるイギリスの輸入は，1685年以前にはその輸出を大いに上回っていた。遅くとも18世紀初期には，その輸入超過が輸出超過へ逆転してしまうことになる。海上監督長官ボンルポ（Bonrepaus）は1686年２月11日，次のような手紙を書いている。彼がフランス商人とイギリス商人を召集したある会議の結論によると，フランスは以前，対イギリス貿易で200万リーヴルの輸出超過であったのが，今やまったく逆転してしまい，そしてイギリスは1685年，フランスから50万ピストールの正貨を得ていたと[45]。

アンダーソンは，フランスにおける様々な分野の産出額が1683年の２億1556万6633リーヴルから1733年の１億4027万8473リーヴルに減少したと推定してい

43）Weiss, op.cit., I, pp.336-337.

44）Scoville, op.cit., p.331.

45）Ibid.

る[46]。これは，実に大きな相違である。この相違の要因については，アンダーソンは，とくに次の二点を挙げている。第一に，ルイ14世の限りない野望のためである。ルイ14世は征服を実現させるために，フランスの人々の生命と貨幣を奪い去った。1672年のオランダへの侵入以来，フランスの歳入は次第に減少するとともに，フランスの土地価格は下落した。第二に，フランスのきわめて勤勉なプロテスタントの多数が国外に追い出されたためである。彼らの多くの富のみならず，技術や産業が運び去られた。それらによって彼らは，移住先においてほとんどすべてのフランスの製造業を移植した。その結果，フランスはまもなく，イギリス，オランダ両国への輸出の大きな減少に直面しはじめるようになったのである。

アンダーソンによれば，1683年と1733年を比較してみると，フランスのイギリスへの輸出の減少額は，① あらゆる種類の絹織物において約60万ポンド，② リンネル，帆布において50万ポンド，③ ビーバの帽子，ガラス製品，時計において22万ポンド，④ あらゆる種類の紙において9万ポンド，⑤ 金物類において4万ポンド（以前はオーヴェニュから輸入されていたが，しかし今やバーミンガムやシュフィールドにおいて良質で安価なものが製造され，莫大な量が輸出されるようになった），⑥ シャロン織，ウステッドと綿の平織地などにおいて15万ポンド（以前ピカルデイーやシャンパーニュから輸入されていたが，今やイギリスで製造され大量に輸出されるようになった），⑦ フランスのワインにおいて20万ポンド，⑧ フランスのブランデーにおいて8万ポンドで，フランスの年間の総損失額は188万ポンドであった。これは，イギリスにおいて製造業がきわめて著しく改善されることによって，イギリスの輸入が利益へ転換したことによるものであった。このような貿易収支の変化においては，高関税，アウクスブルク同盟戦争（1688－97年）とスペイン継承戦争（1701－13年），イギリス経済の正常な発展も重要な要因となったが，しかし，アンダーソンが指摘しているように，ユグノーが果たした役割は大きかったのである[47]。

46）Anderson, op.cit.,II,p.562.

47）この点におけるユグノーの役割について，スコヴィルは「ある程度の影響を行使した可能性は大きい」（Scoville, op.cit.,p.331）として過小評価している。

ボンルポによって言明された50万ピストールのうち少なくとも一部は，宗教的移住者によってフランスから持ち込まれた正貨であった。ハーグのフランス大使は，1687年のルイ14世への手紙の中で，96万ものルイ金貨がイギリス貨幣へ改鋳されるためにイギリス造幣局にすでに送られていた，と書いていた[48]。イギリスへの移住者の多くは，著名な商人や製造業者たちであり，疑いもなく多くの貨幣資産を持参した。マックファーソンによれば，最も少なく見積もっても，移住者5万人が，一人平均60ポンドの貨幣資産を持ち込んだとすれば，イギリスに300万ポンドの貨幣資産を加えることになると推定されている[49]。

また，次の事実に注目すべきである。すなわち，1660年以降6％を維持してきたイギリスの法定利子率が，1714年に5％に低下したのである[50]。1694年のイングランド銀行の設立とそれに伴う他の信用制度の発展（後で述べるように，これらの点にもユグノーは大きな役割を果たしている）によって利子率は低下したが，しかし，ユグノーもこの点に重要な影響を及ぼしている。彼らは，その勤勉さ，低い消費性向，商業・金融上の交際，引入れた正貨によって，イギリスの流動資本に対する需要よりもその供給を増加させたのである[51]。

ユグノーは1690年以降，イギリスの公債への投資家として大きく貢献した。120万ポンドのイングランド銀行株式公募は1694年6月21日に開始され，7月20日に完了した。応募者総数1268人のうち，ユグノーは123人（9.7%）あり，そして応募金額合計は10万4000ポンド（8.6%）であった。同年7月10日にイングランド銀行の総裁・副総裁選挙が実施され，ついで翌11日24人の取締役が選出された。その結果，ユグノーから初代総裁ジョン・ウーブロン（Sir John Houblon）をはじめ，取締役にジェームス・ウーブロン（Sir James Houblon），アブラハム・ウーブロン（Abraham Houblon，後に総裁，1703－05年）などの6人がが選出された。役員選挙はその後毎年行われユグノーから引き続き多

48）Smiles, op.cit., p.315.

49）MacPherson, op.cit., Ⅱ, p.617.

50）Anderson, op.cit., Ⅱ, p.451; Ⅲ, p.59.

51）この点においてもスコヴィルは，ユグノーの役割が考えられるものとして過小評価している（Scoville, op.cit., p.331）。

数の取締役が誕生した[52]。

1697年のイングランド銀行第4次利払リストによれば，ウーブロン一族（4万5000ポンド）をはじめとする前期移住のユグノーの所有株式は，総株式約220万ポンドのうち約33万ポンド（15%）であった。そして，後期移住者のそれは19万ポンド（8.6%）であった。そのうちチーアドール・ヤンセン（Sir Theodore Janssen）は1万7000ポンド，ユグタン（Huguetan）は1万ポンドを所有していた。このようにイングランド銀行創立の3年後には，その公債の約10%が，1680年以降のフランスからの移住者によって所有されていた。初期移住のユグノーは，概して株式の応募者であった。それに対して，後期の移住者は，株式に応募するよりも，むしろそれを購入する傾向にあった。1694年のわずかな期間を除けば，最初のうちはイングランドの株式は割引であり続け，利回りがよくて投資が魅力的であった。しかし，1700年3月には株価が148%の示すようになり，経験豊かなユグノー投資家の多くは所有株式を売却して資本利益を得た[53]。

Million Bank年金（1693年および1694年のMillion Actに基づいて設立されたもので，当時14%の収益を生んでいた）へ応募者によって換算されていなかった，1693－94年におけるMillion Bank年金の購入者リスト（大英博物館に所蔵）によれば，ユグノーはその年金約3000（最初は公債であった）のうち106を所有していた。そして，彼らは，Million Bank（公債ではなかった）への応募者総数の16%で，20万ポンドの株式のうち14%を所有していた。1911－12年の富くじ公債当選者のうち約10%がユグノーであった。これによって，その投資者の10%がユグノーであったことが推察される。ユグノーは1693年のトンチン式年金公債（Tontine Loan，その計画の想像の創作者であるトンチという名のイタリア人にちなんで名付けられた）に投資していた。そして，その後に彼らは，他の年金公債に投資し，様々な形態の短期貸付を行っていた[54]。

52）仙田左千夫『十八世紀イギリスの公債発行』啓文社，1992年，33ページ。

53）Alice C. Carter, "The Huguenot Contribution to the Early Years of the Funded Debt, 1694-1714," *Proceeding of the Huguenot Society of London*, XIX (1955), pp.31-32.↗

また，ユグノーは，合同東インド会社，南海会社の株式投資にも積極的に参与した。1709年の合同東インド会社株式保有者中，ユグノーは110人，金額合計は27万7368ポンドであった。1760年には，ユグノーのその株式所有人員比率は14％であった。南海会社株式保有について子細は不明であるが，ピーター・デメ（Sir Peter Deimé）は1723年に大量の株式をの保有していた[55]。ユグノーの出であるロンドン市長ジェームス・バトマン（James Bateman）は，南海会社の副社長として活躍しており，その父ジョセフ（Joseph）は，フランダースから逃れ小規模な銀行業を開業していた[56]。

さらに，多くのユグノーは，ロンドンの証券市場において仲買人として活躍していた。多額投資者チーアドール・ヤンセンは，早くから仲買業を兼営してた。すぐれた事業家ニコラス・デユパン（Nicholas Dupin），ヒラリー・ルヌ（Hilary Reneu）と，その実弟の事業家ピーター（Peter）・ルヌ，富裕なタフタ商人ステファン・セニュオレ（Stephen Seignoret），紙商人カルドネル（Cardonell）一族・プチ（Pettit）一族，リンネル商人フォネロー（Fonnereaus）一族，ガラス製造業者ブランク（Blanc）一族，醸造業者フヴル（Fevre）一族，カンタベリーの織物業者グラン（Grand）一族なども，仲買業を営んでいた[57]。

ブラッキエール（Blacquiére），オドション（Hodshon），ランベール（Lambert），ジェイユ（Jay），ラブシェール（Labouchére）の各一族は，仲買を専業とし，多数の内外の投資家のために便宜をはかっていた。そして，ロンドンの証券市場において当時のアングロサクソン系の仲買業者と業務を競い合っていた。ユグノーはアングロサクソンに比べて，より容易に Sephardi（スペイン・ポルトガル系のユダヤ人）と接触し，ユダヤ系資本をイギリス債権投資に引き入れる役割を果たした。ロバート・ル・プラストリエ（Robert

54）Carter, op.cit., pp.24-25, 41.

55）仙田前掲書，38，46ページ。

56）新庄博『イングランド銀行成立期における銀行計画と信用通貨』清明会叢書Ⅶ，1969年，45ページ。

57）Carter, op.cit., pp.30-31, 37：仙田前掲書，36ページ。

le Plastrier）は，商人から仲買業へ転向した例として挙げられる。彼は1690年以前，ハドソン湾会社（Hudson's Bay Company）からの生皮の大口買手として活躍していたが，それ以降，金融業に関心をもちはじめ，イングランド銀行株式，合同東インド会社株式，Million Bank 年金などに投資しながら，仲買業を専業とするに至った[58]。

また，ユグノーの国際的規模における金融的結びつきも重要である。イギリス在住のユグノーばかりでなく，オランダ，ドイツ，スイスなどに散住したユグノーも，ロンドンにおける自らの近親，仲買人を通じて投資活動に参与した。例えば，ベルナール（Bernard）一族やヤンセン一族の国際的な結びつきは，きわめて重要である。ベルナール一族はその多くがイギリスに居住したが，一人パリにとどまったサミュエル（Samuel）・ベルナールは，南海泡沫事件期（1719－20年）に彼ら代理人を通じて投機活動に参与して巨額の利益を得た。それ以降の18世紀においてイギリス在住のユグノーは，ユダヤ系のオランダ人とキリスト系のオランダ人の両者の投資家にイギリスの持株を供給していた[59]。

ジェームス・デイドル（James Dayrolles）はアムステルダム在住のまま仲買業を営み，自らもイングランド銀行株式を保有していた。ロッテルダム在住のアブラハム・フロマンチル（Abraham Fromanteel）は，時計商を営み，イギリス投資に係わっていた。オジエ（Augier）一族もロッテルダムに居住して，イングランド銀行株式に投資していた。その近親はロンドンに居住し，仲買業を営みながら，イングランド銀行株式，Million Bank 年金，1707年の年金公債，1693年のトンチン式年金公債，少なくとも二種類の政府短期債の投資に係わっていた[60]。

58）Ibid., p.30, 37, 40.

59）Ibid., p.29.　スマイルズによれば，ユグノーのうち最も富裕なものはオランダへ移住したといわれているが（Smiles, op.cit., p.315.），しかし，イギリスにもヤンセン，ベルナールはじめ，きわめて富裕な財務監督官エルヴァルト（Herwarth，その妻，息子，娘，孫娘），ジアルド（Giardot），ル・コック（le Coq），ランブイエ（Rambouillet），オフレール（Aufrére）などの各一族が移住している（Carter, op.cit., pp.27-28）。

60）Ibid., pp.37-38.

ハーグ在住のバザン（Bazin）一族，ジェノア在住のレヴァランド・ル・クレール（Reverend le Clere）も，ロンドンの代理人を介してイギリス投資に係わっていた。工業のナポレオンといわれているクロムラン（Crommelin，アイルランドのリンネル工業に1万ポンドを投資した）は，自らは株式保有者ではなかったが，しかし，ハーレム在住の親類と金融的結びつきをもっていた。フォルモン（Formont）一族は，ロンドンとチューリッヒにそれぞれ居住し，ベルナールを代理人としてイングランド銀行株式を保有していた。以上のこれらの事例は，何度も何度も増殖されたのである[61]。

イギリス政府は1709年，フランスからの移住者の帰化問題を下院（House Commons）の討議にのせた際に，次のことを考慮していた。フランス人はすでにイングランド銀行に約50万ポンドの資金を提供したが，なお控えめな数字でも200万ポンド以上の資金をイギリス政府に貸与する能力をもっていると[62]。ユグノーの後期移住は，1689年の名誉革命期に生じたイギリスにおける財政上の実験時期とほぼ同時に起こっている。もちろんユグノーは，1689年に勝利を収めた，反フランス的，反カトリック的党派に味方をした。現金あるいは資本におけるユグノーの貢献の割合は，以上みてきたように，約10%だと思われる。この自体の貢献はある程度重要であるが，より一層重要なものは拡張の点から見ての貢献である。ユグノーは，証券業，イギリス投資，対外投資において，そしてユダヤ人資本を持込む点で大きな役割を果たした。また，ユグノーの知的専門職業階級からの投資における効果も決して無視できないのである。このようにユグノー資本は，18世紀におけるプロテスタント・イングランドの政治的安定に対して寄与したのみならず，イギリスの本源的蓄積過程において大きく貢献したのである[63]。

61）Ibid., p.38.
62）Ibid., p.27.
63）Ibid., pp.40-41；仙田前掲書，46～7ページ。

むすび

以上見たように，ユグノーの資本家，熟練労働者，商人，金融業者は，イギリスの工業，商業，金融業に大きな影響を及ぼした。彼らは，イギリスの生産水準を質的に高め，イギリス経済を発展させた。そして，その技術，知識，勤勉さによって，イギリスの歓待に対して十分に報いたのである。この点について，アンダーソンは，「最近のフランスとの二つの戦争（ファルツ戦争，スペイン継承戦争ー金）の期間，イギリスの製造業者は，フランスにおける多くの最良の製造業を模倣することによって，そしてそれらを凌ぐさえすることによって，フランスにきわめて大きな打撃を与えた。これらのフランスの製造業は以前，ヨーロッパにおける他のほとんどすべての諸国に供給してたものであった。われわれの国民は，最初は必要性によって進められたが，その過程でフランスからの移住者によって大いに援助を受けたのであった」[64] と指摘している。

イギリスの経済発展におけるこのようなユグノーの役割は，きわめて大きな意義をもっている。というのも，それは，イギリスがフランスやオランダを抑えながら海洋国家としての優越的地位を確立し，産業革命を開始するための内的諸条件を準備していた時期と関連していたからである。エドワード6世治世下の1550年ではイギリスは，フランス，オランダなどの大陸諸国に比して経済的に後進国であった。しかしながら，18世紀初期までにイギリスは，それらの諸国に追いつき，あるいは勝るようになった。そして，これらの発展は，ユグノーによって促進されたものであった。要するに，ユグノーは，イギリスを18，19世紀における指導的地位に押し上げる上で重要な役割を果たしたのである。

ユグノーの役割を評価するにあたっては，ユグノーの役割によるイギリスなどの移住先における経済発展と，ユグノーの移住に伴うフランス経済の衰退[65] という両面からみる視点，また経済的要因のみならず，政治的要因などを考慮

64）Anderson, op.cit., Ⅲ, p.56.

65）この点に関しては，拙稿「ナント勅令廃止とフランス経済の衰退」（『大阪経済法科大学論集』第60号，1995年3月）を参照

に入れた視点など，総合的視点が必要であろう。この点と関連して，ウオーラーステインの見解が注目される。ウォーラーステインは『近代世界システム』において，18世紀イギリスの安定性のもととなった上流階層の政治的和解にあたる現象が，フランスでは，ほんの部分的にしか起こらなかったとする。そして，彼は，その理由を考えるためには，ユグノーとナント勅令廃止の問題に戻らねばならないとして，「1750年から1815年に至る時期にイギリスが決定的にフランスを引き離すことができたのは，イギリス国家のこの相対的な強さが着実に増していったという事実のためであった。1600年から1750年までの時期に，フランスとイギリスの生産組織にどれほど重要な差があったかとか，その価値体系がどのように違っていたとか，などということよりは，このことこそが重要だったのである」[66] と主張する。

ゾンバルトが指摘するように，ユグノーなどの移住民は，あらゆる移住先で資本主義の形成にきわめて活発に関与したし，すべての国々は，銀行組織，それに主として工業面で彼ら移住民による本質的推進の恩恵を受けた。そして，このことを詳しく証明するのは16，17及び18世紀の経済史を記述することを意味するとされる[67]。この点において，イギリスにおけるユグノーの経済的役割は，その典型であるといえるだろう。そして，それは，ヨーロッパにおける近代資本主義の発展において大きな意義をもっているのである。

---

66) I. ウォーラステイン，川北稔訳『近代世界システム　1600－1750』名古屋大学出版会，1993年，338ページ。

67) Werner Sombart, Der Bourgeis, Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen, 1923, S.384f.　金森誠也訳『ブルジョワ―近代経済人の精神史―』中央公論社，1990年，395～6ページ。ユグノーに関するゾンバルトの見解，それとヴェーバーの見解との比較について詳しくは，拙稿「ウェルナー・ゾンバルトのユグノー論」（大阪経済法科大学経済研究所『経済研究年報』第11号，1992年８月）を参照。